



いずみさの昔と今 第319回

「育てるゝ虫送りゝ」

現在、開催中の歴史館いずみさの春季企画展「耕す・育てる・収穫する」に関連して、今回は「育てる」に注目していきます。

企画展の第3章となる「育てる」のエリアでは、田植えの際に苗をまっすぐ植えるために用いる「田植え縄」を始めとして、柄の先に回転式の歯車がついている「回転式除草機」や、低い土地から高い土地へ水を上げるために欠かせない「水車」など、農作物を育てるための道具が展示されています。

そこで、今回は農作物がすくすくと育つために稲などにつく害虫を追い払うための呪術的行事である「虫送り」を紹介いたします。虫送りは、田植えが終わった頃に全国的に行われていた行事です。ですが、近年では農薬により虫害が少なくなったため、虫送りが行われなくなった地域は少なくありません。

では、どのような行事なのでしょう。この行事では、藁苞や等身大の藁で出来た人形の

なかに食べ物や数匹の稲につく虫をいれ、松明を持ち、鉦や太鼓を鳴らし踊りながら村境まで送ります。そして最後には藁苞や藁人形を投げ捨てる、または焼くというものが多いです。この虫送りに使われる藁人形は、地域により呼び方が異なり、西日本では「サネモリ」と呼ぶ地域があります。この理由は、平安時代の武士である斎藤頼当実盛が乗っていた馬が稲株につまづいて倒れたことにより討たれ、その怨霊がイナゴと化し、大きな虫害をもたらしたという言い伝えからきています。このことから、虫送りは怨霊思想と大きく関係しているのがわかります。またその人形を村境で捨てたり焼いたりする点から、村境は内と外で、自分たちが暮らす領域内外、つまり、現世と別世界（他界）の境界線であるという考えがあったと推察することができます。

このような「虫送り」は長濱でもかつて行われており、松

明を作り村内の池の全てをまわった後に、現在では農協の集荷場となっているトノブチと呼ばれていた池の畔まで行っていたそうです。残念ながら昭和6年頃を最後に、現在も行われていません。しかし、虫送りを行わなくなったという事は、虫害の被害に遭わず、農作物が元気に育っているという証拠ではないでしょうか。



▶水車（当館所蔵）

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの
☎469-7140 Fax469-7141
休館日 月曜日、毎月最終木曜日（いずれも祝日の場合は開館し、その翌日が休館）
開館時間 午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
入館料 無料

日本遺産・北前船文化を巡る⑤ ～いろは蔵通り～

「日本遺産」に追加認定された「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間 ～北前船寄港地・船主集落～」のストーリーを構成する泉佐野市の文化財等を紹介いたします。

問合せ先 文化財保護課



▲いろは蔵通り

「いろは蔵通り」とは、豪商食野・唐金家たちの蔵が立ち並ぶ通りのことを指します。江戸時代から近代まで栄えた豪商たちが、当時泉州最大の港であった佐野浦に複数の蔵を建設し、これを「いろは蔵」と呼びました。廻船業が全盛期の頃は50棟近くあったと言われ、その様を見て、いろは48文字に因んで「いろは」と呼んだという説と、元禄期の赤穂四十七士（萱野三平を入れると四十八士）の忠臣蔵（大石内蔵助）の蔵にかけて呼んだという説もあります。

蔵は全て通りに妻を向ける切妻造、本瓦葺で外壁は板葺、内壁は土壁のままです。建物の平面形は長方形が多いようです。

現存する蔵は、ほとんどが近代になって住居やタオル工場に改造されました。それも現在ではほんの数棟となってしまいましたが、最も古い蔵は江戸時代までさかのぼることが分かっています。

いろは蔵通りから日本で3番目の高さを誇るSiSりんくうタワーが見える景色は、新旧対称的な雰囲気が感じられるビューポイントとなっています。